

なお、木簡の釈読については、秋田大学教授新野直吉氏、東北大学助教授今泉隆雄氏、奈良国立文化財研究所寺崎保広氏の御教示を得た。

(山崎文幸)

(5)

・	「	飯	力
□	□	一斗	□
□	□	□	□
□	□	飯	
□	□	丸子部	□
□	□	稻一	□
□	□	飯	飯
□	□	□	冊
□	□	□	力

人拾捌 男六人 合物陸種
女十二人

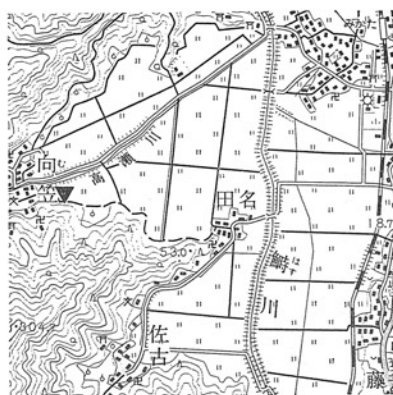
津守部
日置子
倉刀自カ

継人
物部子

不カ
部

嶋

日 [奉余力] □□□□□□ □ [刑力] [刀自力] □□部□□□□□□



(西 津)

状地に営まれた遺跡で、標高約二・〇kmには、高瀬川と合流する鱒川が北流している。周辺には、縄文時代から平安時代の遺跡が点在している。東方約一・五kmには、「若狭国三方郡能登里中臣廣足一斗……」と記された付札木簡及び「西家」等の墨書土器が出土し官衙跡と考えられる田名遺跡が所在

福井・かどや角谷遺跡

- 1 所在地 福井県三方郡三方町向笠
- 2 調査期間 一九八八年（昭⁶³）三月、五月～六月
- 3 発掘機関 三方町教育委員会
- 4 調査担当者 田辺常博
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 三世紀末～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

角谷遺跡は、三方町東部の高瀬川扇状地に営まれた遺跡で、標高二二～一三mの微高地に位置し、北東約二・〇kmには、高瀬川と合

一九八五年より実施されている県営圃場整備事業にともない発掘調査が行われた。その結果、弥生時代後期末の完形品を多く含む弥生土器及び農具・紡織具・板材等の木製品を多量に出土する包含層が検出された。奈良・平安期の遺構は、直径二五cm内外の柱根及び柱穴群、東西方向に割板・杭を一定間隔で打ちこんだ柵列状遺構が検出され、八世紀から一〇世紀に比定される須恵器・土師器・鉄製の刀子・木製品などが出土している。また、墨書土器が二点出土し、うち一点は「秋」と判読できる。木簡は、須恵器・土師器の小破片、栓などの小型木製品、木屑等を包含する砂礫質土層より出土している。

なお、当遺跡の所在する向笠集落は、鎌倉時代初期の正治元年（一一九九）から伊勢大神宮の御厨になっている。

8 木簡の积文・内容

(1) $\times \square$ 今日

●
×

〔布一力〕

天平四年十月廿八日
 (133)×(24)×6 081

木簡は、表裏面ともに記された文書木簡で、上端・側面を欠損している。

釈文は奈良国立文化財研究所の寺崎保広氏の御教示による。

(田辺常博)

